

特選

2009

日本銀行総裁賞

「金融と経済の明日」第7回高校生小論文コンクール

# 高齢者が住みよい社会を目指して

長崎県・長崎県立佐世保西高等学校 1年 永吉 史典

「高齢化社会」とは、総人口に占める老年人口（65歳以上）の比率が7%を超えた社会をいい、その割合が14%を超えた社会を「高齢社会」と呼ぶ。<sup>1)</sup> 高齢化と少子化は必ずしも同時に並行的に進むとは限らないということだが、年金・医療・福祉などの財政面では、両者が同時に進行すると様々な問題が生じるため、少子高齢化と一括することが多いと言われている。推計によれば、2050年には日本は2.5人に1人が65歳以上という世界のどこの国も経験したことがない超高齢社会になるそうである。<sup>1)</sup> そうなれば社会保障制度の危機も懸念されるところである。

僕の祖父は、今、老人介護施設に入所している。毎週僕は、施設を訪れ祖父の顔を見に行く。祖父はもう僕や祖母、母の名前もわからない。何を聞いても、「そうかね。」

と言ってにっこりする。祖父のしわだらけの手をさすりながら、言ってもわからないだろうけれど、僕の近況を話して聞かせる。祖父は、くぼんだ目に柔らかな光をたたえて僕を見つめ、うなずきながら聞いてくれる。この週に一度の祖父との語らいが僕にとっては何物にも替えがたい宝物となっている。

両親共働きの我が家で、僕を心底愛し育ててくれたのは祖父母であった。祖父は几帳面でしかも大変頭の良い人で小学校しか出ていないのだが独学で数学も英語も学び、同じ職場の大学出の人に負けなくらい出世した人である。退職後は好きな畑作りをしながら、僕を育てることに精一杯関わってくれた。畑作りかかに関しても多くの書物を読み、実践しては改良しの繰り返しで農家の人も驚くくらい立派な作物を収穫していた。そんな祖父なので、知識も豊富で大変物知りだった。だから、僕は祖父の話聞くのが大好きだった。

しっかりしていて何でもできる祖父。そんな祖父を襲ったのは、認知症という病だった。始めの頃は、物忘れを年のせいにしていたが次第に、話が通じなくなり、大好きな畑の作物の植え方がわからなくなり、すぐに言葉が出なくなり、どんどん進行していった。祖母や母は病院で検査を受けさせたり、社会福祉協議会の方に相談しに行ったり、デイサービスの施設を見て回ったりしながら、祖父にとって少しでもいい環境を作ってやりたいと一生懸命だった。僕も、祖父の病気の進行を食い止めたいと毎日毎日祖父の名前や年齢、生年月日、家族の名前、今日の月日など尋ね、語りかけるように努めた。家族みんなの協力と努力により足踏み状態のように見えた祖父の病であった。しかし、突然祖父にとってたった一人の息子、つまり僕の叔父のあまりにも若

すぎる死により祖父はかなりのショックを受け病は一気に進行したのである。祖父は散歩が大好きで一人でどこまででも歩いていっていた。佐々から冷水岳まで歩いて往復したことを知ったときには、家族全員で顔を見合わせ大変驚いたものだった。あれだけ土地感があり地理に詳しくははずなのに祖父は散歩に行つては、道に迷い帰ることができなくなった。祖母と母と僕は必死に祖父を捜し回ったものだ。また、夜中に家を抜け出して徘徊するようにもなった。食事をして、まず始めに刺身醤油を飲み干すなど考えられないような見ていた人が気持ち悪くなるような食べ方をするようにもなった。祖母は少しでも祖父のそばにいて自分の力で介護してやりたいと頑張っていたが、もうこれ以上続けると今度は祖母の方が倒れてしまうということで意を決して、あちらこちらの介護施設を見て回り、一番祖父に向いている施設に申し込みをした。申し込みをしたが、入所できるまでにかかなりの月日を要した。その間、僕たち家族は、協力して祖父を見守り、食事からトイレの世話まで必死にやった。僕は、祖父の散歩につきあい、祖父から目を離さないようにした。学校から帰ると祖父に語りかけ、世話をし、少しでも祖母の負担が減るように努めた。

施設から入所の手続きに来てくれと言われた日までの月日はなんと長く感じたことだろう。家族だからそばにいて介護してあげたい。しかしそれを続けるにはかなりの労力と金銭的な問題がある。祖父は車に乗せられて手を振っていた。僕は胸が張り裂けそうな思いで祖父を笑顔で見送ったあの日のことを決して忘れることはないだろう。祖母はもっともつつらかったに違いない。

施設に入り、介護士さんたちに世話をしてもらって祖父は笑顔で暮らしている。祖母はそれでも祖父のために週に最低3回は施設を訪れあれやこれや世話をしている。車を運転できない祖母は、バスやタクシーを利用している。今まで家族のために一生懸命働いてくれた祖父のためだから、このくらい何でもないと祖母は笑顔で行っているが、祖母の負担はかなり厳しいものがある。年金生活の祖母は、支給される年金の中から祖父の施設にお金を払っている。介護認定で要介護1に認定された祖父なので、祖父母が払っている介護保険料（年間9万円あまり）の中からいくらかは支給されているが、祖母は施設に毎月14万円くらいを支払っている。それ以外にも、健康保険料を納めなくてはならないし、各種税金も納めなくてはならないし、祖母が病院にかかれば医療費もいる。もちろん祖父も病気をすればその分施設に医療費を納めなくてはならないし、散髪をすれば散髪代も別にかかってくる。祖母だって生きていかなくてはならないので、生活費はもちろん必要だ。現実問題として、祖母は今ぎりぎりのところだという。自分が病気でもして入院でもしたら、アウトだし、祖父の面倒を見てあげることができなくなると嘆く。

このような高齢者が日本にはかなりたくさんいるはずだ。また、これからどんどん増えてくると考えられる。行政の取り組みとしては、高齢社会対策基本法や後期高齢者医療制度などに基づいて高齢者への福祉が行われている。もちろん、老齢年金の給付によって生活の救済が行われているが、かなり減額され厳しい生活を余儀なくされているようだ。後期高齢者医療制度では、医療費の負担額は1割とはなっているが、保険料は原則として年金から天引き徴収されるのである。

生活に追われて生き甲斐をなくしている高齢者が多いのが現状である。これでは高齢者にとって住みよい社会とは決して言えないと思う。

本格的な高齢社会になっていると考えられる、僕たちが大人になった頃、僕たちはいったいどのようなことをしていけばよいのだろうか。高齢者は、僕たちにとって常に尊敬に値し大切にしなければならない存在だ。祖父母たちがいたから父母がいて、僕たちがいる。命はつながっているのだ。高齢者が生き生きと生きてゆける社会を築いてゆくのは僕たちなのだ。そのために高齢者が持っている知恵袋をもっと活用することで、つまり高齢者が社会に貢献できるよう雇用を促進することも大切だと思う。また、高齢者を受け入れる意識をみんなが持ち、高齢者を将来の自分の姿であることを認識して、接し、誰もが長生きをして良かったと実感できるような住みよい社会を作っていくことが大切だと思う。

さらに、高齢者のためにも社会福祉制度のいっそうの充実を図るべきだと思う。インターネットでいろいろ調べてみた結果、日本は福祉に関する意識が低いこと、福祉にかける予算の割合もスウェーデンやアメリカなどに比べても20%と高くないとの情報があった。心配なく暮らせるにはやはり充実した福祉が必要であろう。先日も、テレビで消費税の引き上げについての話があったが、十分な医療や福祉、社会保障が受けられるようにするには、無駄な予算を削って福祉に回したり、あるいは僕たちが消費税や年金、介護保険料をきちんと支払ったりしていくことが必要だと思う。目先のことだけを考えて消費税を引き上げることに反対したり、年金や介護保険料を納めなかったりするのはなく、将来自分が高齢者になったときに豊かに住みよい社会にしておくためだと考えて実行していかなければならないのではないだろうか。

最後に、今僕にできることを考えてみた。まず、将来できるだけ介護を受けずに生活できるように自分の健康に気を付けたい。家族ともバランスのとれた栄養、適度な運動、十分な休養を日常生活の中で習慣づけることを話題にして協力して実践していきたい。また、人生80年といわれるように僕たちの一生は大変長くなったので、自分の将来について考えしっかり働いてお年寄りを支えるための税金や年金、介護保険料を納めることができる大人になりたい。さらに、お年寄りの豊かな知識や経験、技能、伝統文化などを学びしっかり受け継いでいきたい。また、僕の住んでいる世知原町も高齢化が進み、近所に身体の弱くなったお年寄りや一人暮らしのお年寄りも多くなってきた。思いやりの心や敬いの心で接し、僕にできる手助けをしていきたい。それから、今僕は、美化委員の一員として左石駅の清掃活動に参加しているが、今後は環境美化活動やボランティア活動などに積極的に参加し、住みよい町作りに貢献したい。

日本中のすべての人一人一人の心の中で高齢社会の現実を良く理解し自分自身で、また、社会に対して何をしなければならないかを考え、行動していこうとする種がまかれ、すくすく育ってほしいと心から願っている。そして僕は、祖父や祖母そして、すべてのお年寄りが安心して生活していける住みよい社会になるよう、お年寄りを支える「柱」の一つになりたいと強く思っている。

事務局注 1) 『平成21年版高齢社会白書』内閣府、2009年